

〔16〕 エイフマン振付『テレーズ・ラカン』

～現前の感動を生きる～

1992年1月31日 東京新聞 夕刊

● ハプニング

ロシアの現代バレエの振付家ポリス・エイフマン率いるサンクトペテルブルク・バレエ・シアター(旧称レニングラード・バレエ・シアター)の日本公演が、衣装・装置を積んだコンテナ便が到着せず、期日(23日)に幕が開けられなくなった。現在のロシアの混乱をしのばせるハプニングだが、おかげで初日の『テレーズ・ラカン』が見られなくなって、私はがっかりした。この作品はエミール・ゾラの心理的な問題小説のバレエ化で、かつて映画『嘆きのテレーズ』でシモーヌ・シニョレが好演したのを見て、おおいに期待していたのである。

その代わりというのも変な話だが、エイフマン氏自身に会って、現代に生きる振付家としてのさまざまなおまな想いを聞くことができた。

稽古場になっている劇場を訪ねると、がらんとした客席から舞台の上のダンサーたちに向かってエイフマンの声が飛び、同じところを繰り返し練習している。やっとパスすると、すぐにまた次のクレーム。外国にしようが、衣装が無かろうが、ともかくもこうして稽古を重ねていく。外見の華やかさとはうらはらの、これが舞台に生きる人間の日々の現実だという、ずしりとした実感が伝わってくる。

エイフマンのバレエは、鮮やかな色彩と大胆な構図が展開するなかに、時代への絶望や風刺がトゲのように突き刺さり、明るさと暗さが激しく交錯するダイナミックな舞台である。

[16] エイフマン振付『テレーズ・ラカン』

～現前の感動を生きる～

1992年1月31日 東京新聞 夕刊

しかし実際に会って語るその人は、深い眼の表情で、ときどき額に手をあてて慎重にことばを選ぶ、どちらかといえば学者肌の印象だった。

● 言葉より根源的

彼が振付家を志したのはまだ十代の始めだったというが、それは肉体表現が持っている力、言葉よりもなお根源的に人を動かす力に気づいたからだ。原始の部族では、踊りは戦いに出る人々を鼓舞し、死への恐怖を鎮めた。舞踊には本来そういう力があった、それは現代でも変わらないと、彼は考えている。

「アメリカのあるフェスティバルで『テレーズ・ラカン』を上演したときのことですが、観客の感動がうわあーと盛り上がってくるのが感じられた。それはほんとうにすばらしい、魔術のような体験でした。フランスの物語をバツハとシュニトケの音楽でロシアのダンサーが踊ったものを、アメリカの観客が見て、それらがひとつになる。言語の障壁を超えて文化が入り交じったところで、そのようにも大きく人を揺り動かすという点で、振付家の仕事はもっと評価し直されるべきだと思いますね。舞踊とか振付というのは、現前の感動を生きる芸術です」

● 文学との関係

エイフマンの作品は、ブルガークอฟの『巨匠とマルガリータ』、ボーマルシェの『フィガロの結婚』、そして『ピノキオ』など、文学作品を下敷きにした

〔16〕 エイフマン振付『テレーズ・ラカン』

～現前の感動を生きる～

1992年1月31日 東京新聞 夕刊

ものが多い。言葉にまさる舞踊の力を確信しているというのに、これはいささか矛盾ではあるまいか。「文学をバレエにするといいっても、受けた刺激をバレエにするというだけで、もとの作品とバレエはまったく別のものです。文学というのは複雑な要素をふくむ密度の高い芸術なので、ヒントになることが多い。それに、発想の源を示すという意味で、原作は観客の理解の助けになると思っています」

現代バレエの旗手としては、クラシック・バレエのことはどう考えているのだろうか。

「見て美しいものだし、保存する価値はあると思いますよ。でも、多くのバレエ団では、テクニックのある上手なダンサーがどうもうまくいかないということがある。たぶん厳格すぎるレッスンの結果、抑制がききすぎて、内面から沸き上がってくるものを表現しなくなるのでしょう。ぼくは内面を表現することに重きをおくから。ピノキオの役を上手に踊ることよりも、それがほんとうにピノキオに見えることのほうが、ずっとだいじなんです。」

「ロシアのバレエがクラシック一辺倒になったのは、西側の責任でもあるんですよ。ウオトカとキャビアとクラシック・バレエさえ持っていけば金になるという考えを植えつけて、墮落させてしまった」

批評を気にしますか、と訊ねたら、「いや、ぜんぜん」と答えて、

「アメリカの芸術家はとても気にするらしいけど、ソ連の時代には良い芸術と悪い芸術が決まっていま

〔16〕 エイフマン振付『テレーズ・ラカン』

～現前の感動を生きる～

1992年1月31日 東京新聞 夕刊

したからね。批評家は、ほめるべきか、けなすべきか、知れば良かった」

振り返って日本の批評はどうだろうか、考えさせられることばである。

「それにぼくは、批評というのは、それ自体ひとつの作品だと考えているんです。ぼくのバレエが原作とは別の作品であるように、批評はバレエに刺激を受けた別の作品でしょう、だからどう書かれています、この人はこういうものの見方をするんだなと思うだけです」

まったくその通りだと、私も思う。惜しむらくは、この原稿がそういう意味での批評になっていないことだ。エイフマンの人と作品が私自身のものになるには、いま少し時間がかかるのかもしれない。